

ただいまご紹介に預かりました、武蔵野学院大学の桐田です。このたびは日本教育学会奨励賞を賜り、誠に名誉に存じます。

私がマキシム・グリーンを研究したいと思い至ったきっかけは、五年前、私が学生クリエイターを支援するとある財団で職員として勤務していて、理系も文系も専門学校も高専も関わりなく、分野も問わず、創造に携わっている25歳未満の学生クリエイターたちによる展示会の運営をしていた時のことでした。

そこでは巨大な絵画も、繊細なインスタレーションも、精巧なガジェットも、プログラミングも、ロボットも、映画も、演劇も、ロックもポップスも現代音楽も何でもありの混沌とした世界が展示されていたのですが、それだけに老夫婦も親子連れも、カップルも物珍しさでわいわいと楽しみながら、これすごい、これ面白い、でもこれは一体なんだろうねえと会話してくれているのがそこかしこで聞こえていました。

展示会を終えて、くたくたになりながらその三日間の出来事を振り返っているとき、ああ、アートとはこんなふうに世代を超えたコミュニケーションを生み出し、関心を超えて人々を繋いでいく力があるものだったのだと感銘を受け、アートをコミュニケーションと捉える研究がしてみたいと思いながら日々を過ごしているうちに、マキシム・グリーンの訃報に——実際には亡くなられてから五年ほど経っていたのですが、接しました。名前だけは存じていながら未読だった彼女の著作に触れた途端、これだと感じたのでした。

しかしマキシム・グリーンの研究を始めた当初は、著作や論考を読み進めても理解が及ばず、それゆえ論文全体の構想すらうまくまとめられないでいました。そんな悩みを、ふいに大学時代に文芸を専攻していた妻に告げてみたところ、彼女の著作がどんなものなのか尋ねられて、自分の理解の範囲で伝えてみると、そこに書かれていることは私が経験してきた現実ととてもよく似ているという応えが返ってきたのでした。

このやり取りを経て、グリーンの理解の助けになるのではと彼女の勧めてくれた須賀敦子や堀江敏幸、ヴァージニア・ウルフなどの作家が探求してきた、他者の生きる現実に触れ、自身の現実との差異を辿りながら、この世界のあり方を問う精神を磨きつづける文芸の「声」こそが彼女の著作に埋め込まれているものだったのではないかという仮説がある日生まれたのですが、その時にはグリーンを研究しようと決めてからもう四年以上が経過していました。

グリーンが直面し続けてきた自他の声の多元性、特にその背景をなしているフェミニズム

ム哲学については、統計的に見れば女性の方が人口ははるかに多いのに、いまだ政治的・経済的・文化的平等を実現し得ていない日本で、女性として生きる現実を教えてくれた妻と友人たちの声、また日本の未成熟なアートシーンでストーキング被害やハラスメントが常態化しているなかアーティストとして生きる現実を教えてくれたアーティストたちの声、その現実性が実在することを想像すらされていない空間でマイノリティとして生きる現実を教えてくれた友人たちの声に出会うことができずにいたら、自分の周縁性を引き受け自分ごととして書くことも、主題として書くことすらもままならなかったと思います。

そのため長い期間にわたってご指導をいただいた先生方にはご迷惑ばかりお掛けしていましたが、上野先生から「まずは書けそうなところから書いてみましょう」と、優しく背中を押していただいたおかげで自分のこの仮説を問うてみようと思えることができ、結果、このようなすばらしい賞を受賞することができたと感じています。

改めてこの賞は、手厚いご指導をくださった先生方と、査読プロセスのなかで真摯に批判してくださった会員の皆さま、また得難い家族、友人、知人との出会いがあっていただくことのできた賞だと感じております。

修士時代からお世話になっている上智大学の奈須正裕先生。私が研究の方向性を教科教育学から学校教育学・教育哲学へと変えた折より、ご指導いただいている上野正道先生。また今回、拙論を査読してくださった査読者の会員の皆さま、拙論を奨励賞に推薦してくださった奨励賞委員会の会員の皆さま。この場をお借りして、感謝の意を申し上げます。本当にありがとうございます。

これからも初心を忘れずに、グリーンのように自他の声に出会いつづけられるよう精いっぱい努力して、教育学という途方もない領野の探究に少しでも貢献できるよう研究に、実践に励んでまいります。まだまだ至らない点が多くありますが、引き続きご指導、ご鞭撻のほど、よろしく願いいたします。

本日は誠に、ありがとうございました。

2024年8月31日

桐田 敬介